

委託事業実施内容報告書

平成21年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【ボランティアを対象とした実践的研修】

受託団体名 (社)国際日本語普及協会 (AJALT)

1 事業の趣旨・目的

地域の日本語支援活動はすでに20年以上の歴史を重ね、全国各地で実践のノウハウが蓄積されています。また、最新の言語教育では、欧州の行動中心主義の考え方をはじめとして、多文化共生社会での実践にふさわしい言語教育のあり方が研究、開発されています。このような中で(社)国際日本語普及協会は、2008年度文化庁の日本語教育研究委嘱事業で、これらの新しい動きとさまざまな支援のあり方を概観、紹介し、その上で学習者の自主性を重んじ、その社会参加に役立つ支援のあり方を提案しました。

国や行政が公的な言語保障として日本語学習の手当てをすべきであると、当協会は30年以上、主張を続けて来ました。しかし、ボランティアに多くの支援を依存する地域日本語教育の現状は、未だ変わってはいません。

この研修は、将来、国や行政が地域日本語教育の専門家による言語保障としての日本語教育施策を実施するときに備え、必要な人材として、まず、地域の日本語教室のコーディネータを育成することから始めようとするものです。

多文化共生社会の基盤づくりに向けて、学習者の主体性を重んじ、その社会参加を促進するような、多文化共生社会の実践にふさわしい地域の教室活動をデザインする「教室コーディネータ」を育成することを研修の目的としています。

2 企画委員会の開催について

【概要】

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
平成21年9月19日	(社)国際日本語普及協会	岩見宮子 関口明子 吉田依子 樋口博 品田潤子	研修の趣旨説明 研修企画の概要説明 参加申し込み者 研修内容と研修形態等について意見交換	外部委員について説明。今年度の研修の趣旨目的と方向性について説明。参加申込者の背景について説明。研修内容の企画について検討した。
平成22年3月15日	(社)国際日本語普及協会	金田智子 櫻井ひろ子 岩見宮子	研修の振り返り 運営上の評価 実習結果の報告と振り返り	第2回運営委員会 全15回の研修の報告をし、振り返りを行なった。

		関口明子 吉田依子 樋口博 品田潤子	参加者のアンケート結果の 分析 その他委員からのコメント	実習の結果と発表の報告 を行い、実習の方法 について評価した。アン ケートの結果を報告し、 意見交換を行なった
--	--	-----------------------------	------------------------------------	---

3 研修講座の内容について

- (1) 研修講座名「教室コーディネータ」育成研修
- (2) 研修の目標 多文化共生社会の基盤づくりに資する教室活動のデザインづくりのノウハウを学習し、現場の活動の改善策を考える

(3) 受講者の総数 17 人

(4) 開催時間数(回数) 45 時間 (15 回)

(5) 参加対象者の要件 地域日本語支援活動経験 2 年以上

(6) 受講者の募集方法

当協会ホームページに掲載し募集をかけた。その他ちらしを神奈川県内の日本語教室へ郵送し、配布を依頼した。ちらし添付。

(7) 研修会場

講義、実習共に下記会場で実施した。

あーすぷらざ(神奈川県立地域市民かながわプラザ)1階大会議室

神奈川県横浜市栄区小菅ヶ谷 1-2-1

(8) 使用した教材・リソース

『生活日本語ワークブック』(社団法人国際日本語普及協会開発教材)

『リソース型生活日本語』(社団法人国際日本語普及協会制作 WEB データベース)

難民向けに当協会が開発した教材

その他、各講師から教材の紹介があった。

(9) 講座内容

日 時	講座名／学習内容	講 師	受講者数
10 月 16 日 13:30～16:30	概論1 日本における 地域日本語支援施 策の現状と今後	社団法人国際日本語普及協会 専務理事 岩見宮子	13 名
10 月 23 日 13:30～16:30	概論2 行動中心主 義と地域日本語支 援活動-学習者の社会 参加を目指す日本語	社団法人国際日本語普及協会 研究開発コーディネータ 品田潤子	14 名

	支援とはー		
10月30日 13:30～16:30	概論3 支援活動を デザインするとはどう いうことかー教室コ ーディネーターの役割 ー	鳥取大学国際交流センター 講師 御館久里恵	15名
11月6日 13:30～16:30	概論4 学習のニー ズと支援活動を考え る	鳥取大学国際交流センター 講師 御館久里恵	11名
11月13日 13:30～16:30	事例研究1 とよた日 本語学習支援システ ム概要	とよた日本語学習支援システム 構築プロジェクト システムコー ディネーター 土井佳彦	10名
11月20日 13:30～16:30	事例研究2 とよた日 本語学習支援システ ム活動体験	とよた日本語学習支援システム 構築プロジェクト システムコー ディネーター 土井佳彦	11名
12月4日 13:30～16:30	地域社会・企業との つながり	(財)海外技術者研修協会 AOTS 日本語センター 神吉宇 ー	10名
12月11日 13:30～16:30	行動分析演習ー生 活日本語の行動目 標ー	社団法人国際日本語普及協会 研究開発コーディネータ 品田潤子 同 所属教師 高橋桂子	11名
12月18日 13:30～16:30	音声・表記・文法・文 型の学習支援	社団法人国際日本語普及協会 研究開発コーディネータ 品田潤子	10名
1月15日 13:30～16:30	地域日本語支援と協 働学習	東京海洋大学海洋政策文化学 科教授 池田玲子	12名
1月22日 13:30～16:30	学習支援と教材	社団法人国際日本語普及協会 人材育成開発部長 樋口 博 同 所属教師 高橋桂子	10名
1月29日 13:30～16:30	実習1 活動デザインの準備	大学共同利用機構法人国立国 語研究所 上級研究員金田智子 東京外国語大学多言語・多文化 教育センター フェロー吉田聖子	10名

2月5日 13:30～16:30	実習2 活動デザイングループ活動ーデザイン上のポイント(その1)	同上	10名
2月12日 13:30～16:30	実習3 活動デザイングループ活動ーデザイン上のポイント(その2)	同上	10名
2月19日 13:30～16:30	実習4 活動デザイン 発表とフィードバック	同上	10名

(10) 講座の評価

① 受講生に対するアンケート

最終日出席者 10 名にアンケート用紙を配付し、6 名より回答を得た。

1. 年齢 50 代 2 名、60 代 2 名、70 代 2 名。

2. 支援・交流活動歴

3年未満 1 名、6-10 年 1 名、11-15 年 2 名、16 年以上 2 名

3. 取り上げた内容の構成について

1) 非常によかった・・・0 名 2) よかった・・・2 名 3) どちらとも言えない・・・2 名

4) よくなかった・・・1 名 5) 全くよくなかった・・・0 名 不明・・・1 名

自由回答には、以下のようなコメントがあった。

- ・それぞれの話は面白く参考になったが、つながりが見えにくかった。
- ・活動例のいくつかはおもしろく参考になった。
- ・神奈川県下の外国人日本語支援の事情を把握した講座も期待する。
- ・CEFR に関する話が最初に出たので、理解するのが難しかった。

4. 講座全体の時間の長さについて(1回3時間×15回 計45時間)

1) 非常に短かった・・・0 名 2) 少し短かった・・・2 名 3) ちょうどよかった・・・0 名

4) 少し長かった・・・0 名 5) 非常に長かった・・・0 名

自由回答では以下のようなコメントがあった。

(以下のコメントについては、原文を元に適宜まとめたものである。)

- ・ 1 回当たりの時間が少し短かったが、全体で 15 回は長かった。
- ・ 実習時間にもう少し余裕があってもよかったと思ったが、毎回時間のたつのも忘れるぐらい楽しかった。
- ・ 長いと言えば長いですが、これぐらいの内容を盛り込まないと、コーディネータ育成にはならないと思う。これでよかったと思う。

Q1 「教室コーディネータ」育成研修に参加されてのご意見・ご感想、講座に対するご要望など」に対して以下のような回答があった。

- ・ 今のわたしのクラスでもコーディネータの必要性を以前から感じていてなにか私に出来る方法がないかと1年ほど前から模索しておりました。誰か著名な人をお願いするのではなく、自分たちで考えたかったのです。それで最初から目的を持って参加したのですがとても計画性の要求されるものであることを知りました。
- ・ 日本における今の外国人支援の様子、特に日本語支援の現状など10年前とは違ってきていること感じてはいたが、よく理解できた。
- ・ コーディネーターの役割についてもとてもわかりやすく仲間ともいろいろ共感できてまた自分の適性に少し自信なども持てた気がして毎回楽しみになってきた。
- ・ 地域での活動はその土地その土地で特色があると思うが、その中においても今後の教室のありかたの参考になるものがいくつかあった。
- ・ いろいろな形の学習支援のありかた、協働作業、教材の多様も目新しいものもありとてもよい参考になった。
- ・ 実習のところがなかなか難しくて、私には最後まで不完全燃焼であった。
- ・ 活動デザインなるものこんなに緻密にしたこともなく、また知り合って間もない同士たちでのグループ活動に少々戸惑ったが、とても貴重な体験だった。
- ・ このような内容、講師陣、運営手法等非常に充実した研修に参加させていただき感謝している。今後の支援に反映させていきたいと思っている。
- ・ 今回の講座に参加して、自分が抱えながら明らかにできなかった問題について気づくことができた。また、その問題に関して話し合う仲間ができ、問題を解決する糸口を見つけることもできた。これは私にとって非常に大きな収穫であり、このような場に参加できたことを大変感謝している。
- ・ 残念なことは「教室コーディネータ」というものがなんであるかという答えに至らなかったこと。その場所、その場所でボランティア教室が求められること、あり方、活動の形などが違うため「教室コーディネータ」の性質もその場その場でそれぞれに違うと思う。また、現実の教室活動では「教室コーディネータ」を置く人的・経済的余裕もないと思う。しかし、「教室コーディネータ」の性格が明確になり、不可欠であると認識されれば行政側の助けが得られるなど流れは変わるのではという思いで参加した。
- ・ まず「教室コーディネータ」とは「何ぞや」そして「なぜ必要なのか」が明らかにされ提示されることが必要ではないかと思う。また、建設的な意見交換という観点から、参加者はボランティア経験だけでなく、教室運営を経験した人が適当ではないかと考えます。今後の育成研修の成果を期待する。

- ・ 他の団体のことがわかり、同じ悩みがあることがわかり、1 人ではなく、相談や話ができる仲間がいることにホッした。

<全体的なコメント>

- ・ 地域日本語教室の運営の困難さと問題点は①会場確保の困難さ②日本社会で生きていくのに本当に支援を必要とする乳幼児を抱えた母親のための保育の問題など日本語支援以前に有るのが現状であるが、この事への認識が感じられない。
- ・ 本当の意味で、地域で例え小規模でも外国人に寄り添って、精神面、生活面でも支援しながら日本語支援をしている町の教室からの参加者が殆ど居なかったことが残念。
- ・ 横浜市の「教室マップ」に登録している 70 教室のうち 7 つのラウンジ以外は民間の任意団体の教室で、その様な支援者に実際は支えられている現状を認識していただきたい。行政からの財政的な支援は全くない。せめて教場となる会場の提供なども今後声をあげていきたい。

Q2 「教室の活動内容や運営に関して、今後取組んで行きたいことなど」に対しては、以下のような回答があった。

- ・ まず取組みたいことは今の熱心なボランティアの良さを生かしながら教科書中心からもっと楽しく活動できる要素を取り入れて、理念を共有化できるクラスづくりをしたい。
- ・ 文型に執着するなら、その文型はどんな場面によく使われるか、どんな人が使うかなど分析して学習者に合う場面設定の一覧表のようなものを皆で作って共有して進めるなどしたい。
- ・ 今回の4グループの実習での課題すべてが、われわれの課題であり、やるべきことは多い。日本語教室の理念、目的、方法などの作成、それに必要な支援者育成のプログラムづくりなど、課題が山積している。また、支援者同士の意識の差を小さくし、作成した理念の共有化や浸透にも時間がかかりそうである。まずは、そのための基礎が築ければと思う。今回、学んだり、学びの中で気づいたことを利用、応用し、前へ進めたい。
- ・ 今回の研修で得た知識と手法、考え方を持ち帰って、みんなで検討して、改善していきたい。従来の文型積み上げ方式の初級クラスに small change の工夫を 15 分取り入れ、同じ地域に暮らす市民として共に「対等な関係」を構築し、相互理解力の向上、多文化共生社会の実現を目指す教室にしたいと願っている。
- ・ 先日、ボランティアミーティングがあり、この研修を報告する時間が設けられていたので、実習での発表を報告し、対話型の活動を増やすよう提言した。今後も少しずつでもコミュニケーション主体の対話型の活動にシフトしていけるよう話し合っていくつもりだ。

② 実施主体からの研修内容結果評価

- ・ 参加者は日頃から教室活動の課題について思うところのある問題意識の高い人々であり、大変に熱心に取り組んでいた。
- ・ 多文化共生社会の基盤づくりに資する日本語教室の理念や目的、方向性については参加者の間では共有できたと思われる。
- ・ また、各講師から提供された活動の方法・手法についてさっそくに教室で使ってみた参加者もあり、たくさんヒントになることを紹介できたと思われる。
- ・ 研修プログラムを作る段階では、現場の問題を整理し建設的な議論を始めるための枠組みを提供できればと考えた。しかし、参加者の各現場で起きていることは様々であり、また、それを見る人も立場が異なるので、参加者間で、具体的な事柄を整理するための概念を共有することは難しかった。
今後、今回の研修で学んだこと、気づいたことを各教室へ持ち帰って、問題解決に向かってほしい。参加者にもそのような意識が生まれていることは収穫であった。
- ・ 参加者にとっては理想と現実に分のことができることの違いに思いを馳せ、small change から始めることに気づいた。活動の目的に沿った具体的な活動の方法・手法を構築するまでには今回の研修では十分にできず、その入り口に辿り着いたところである。

③ 実施主体からの外国人支援体制等今後の計画

- ・ 当協会の事業の中でも地域の日本語支援事業は公益事業として最も重要な位置を占めている。神奈川県は、1980 年代から当協会がインドシナ難民への日本語教育を担当してきた大和市の難民定住促進センターが置かれていた地域で、センター退所後の難民支援者の方々への研修を継続してきたなど縁の深い地域である。今回の研修でさらに広範囲の神奈川県下の日本語教室活動の現状についてより一層、理解を深めることができた。どの参加者も支援者同士のコミュニケーション不足、活動理念、方向性の共有化の不足を最も強く訴えていた。日本語教室の理念、目的を作成し、それを踏まえた活動内容、支援者育成のプログラムづくりなど課題が山積している。今後は各教室を訪問し、活動の実態、現状、課題の理解を具体的に聴き取り、相談、アドバイス、研修のプログラムづくりなど、問題解決のため、具体的な支援を行っていききたい。

(11) 事業の成果

参加者は日頃から教室活動の課題について問題意識の高い人々であり、大変に熱心に取り組む、多文化共生社会に相応しい活動の理念や手法について学びと気づきを得ることができ

た。

参加者には、既に教室のコーディネータの必要性を感じ解決方法を模索していた人、漠然と問題を感じていた人などさまざまであるが、各々課題点を掘り下げることができ、問題解決のヒントを見つけることができた。また、研修を通じて、参加者が自らを振り返り、その役割に自信をつけることができた。

各講師から提供された活動の方法・手法は具体的であり、各教室の活動の改善に参考となるたくさんの事例を紹介することができた。

各参加者同士の話し合いを通じて、教室の現状と課題、コーディネータの必要性和役割について共感することができ、同じ問題意識を持つ仲間ができた。今後の問題解決のためのネットワークづくりに発展する期待が持てる。

今回の研修に最後まで継続して参加した方々は、目的にかなった日本語教室活動のデザインづくりの手法について学びを深め、実習において、問題解決のための案を作成することができた。皆、実際に、改善を行なっていくことに前向きである。神奈川県下において、多文化共生社会の基盤づくりに向けた教室活動のコーディネータとして、活動できる場があれば、是非今回の研修の参加者にも、その役割を担えるようになることを期待したい。

(12) 今後の課題

今回の研修では「教室コーディネータ」をそれぞれの現場にふさわしい日本語教室での支援活動をデザインし、その活動を円滑に運営するために、幅広い知識や実践力を備えた人材」と定義した。具体的にはそれぞれの現場の実情を踏まえた支援活動を考えてもらうことを期待したが、参加者にとっては「教室コーディネータ」とは何かは今ひとつイメージできなかったようだ。講師のふりかえりの会での発言で、研修の受講生は講師に問題解決の答えを求める人が多いが、「課題は一つ一つ現場でしか答えがでない」ことに気づいて欲しい、しかしそれを伝えることは難しいとのコメントがあった。しかし、参加者も最後には、できることから自分達の教室で始めようとの気持ちになっていた。ボランティア間ではだれが問題解決のためのイニシアティブをとるかは大変に難しい環境であることが参加者からも指摘されている。今後は、現場で起きている具体的な課題の一つずつ注目して、問題解決を図ることができるよう相談、アドバイスまたは研修を行なっていくことが有効ではないかと思う。

以上